

見えるものと見えないもの

平 松 一 夫

昨年、創立者ランバス先生の生誕150周年を記念するさまざまな行事が行われる中で、ランバス先生の足跡を記す地図が図書館に展示された。世界を舞台に世界市民として使命を果たされたランバス先生の活動には圧倒される思いがする。地図を見て私が思ったことは、これをもっと多くの学生に見えるようにしたいということであった。例えば、関西学院博物館を作り、最先端の技術を駆使して、ランバス先生の足跡を学ぶことができるようにするというのはどうだろう。

さて、話は変わるが、本年もまた災害で多くの方々が被害に遭われた。10年前の阪神淡路大震災ではランバス先生ゆかりの神戸・栄光教会が倒壊したが、時を経て元の姿に再建された。ランバス先生ゆかりの広島・流川教会は被爆により外壁と鐘楼以外が失われ保存も断念されたが、後に移設され、当初の建物の一部が今も活かされていると聞く。アメリカ南部を襲ったハリケーン・カトリナは、ランバス先生ゆかりの地、ミシシッピ州マディソンにも被害をもたらした。マディソン・ユナイテッド・メソジスト・チャーチも避難所として活動しているとのことである。その近くにあるランバス一家ゆかりのパール・リバー・チャーチは古い簡素な木造の建物である。ハリケーンでどのような被害を受けたかが気がりである。

私は上に、ランバス先生の足跡を目に見える形にしたいという思いと、ランバス先生ゆかりの教会が災害により見える形では当初の姿を残していないことへの思いをつづった。しかし、大切なことは目に見えないランバス精神をいかに私たちが継承し、発展させるかである。折しも、正門横ではちょうど今、宗教センターの立て替えの工事が進められており、来春完成すれば「吉岡記念館」と称されることになっている。これは災害による工事ではない。関西学院の建学の理念という見えないものを見る形にする活動拠点として、21世紀の関西学院で中心的役割を果たすことが期待されているのである。

116周年の創立記念日にあたり、関西学院に連なる私たちは共に、見えないものこそを再確認し、力強く継承する決意を新たにしたいものである。

(学長)